

## F-1

# 日本手話の「いう」の拡張：証拠性と習慣性・一般性への経路

高嶋 由布子\*・黒田 栄光†・シャーマン・ウィルコックス‡

## 1. はじめに

日本手話では、非典型的な習慣性を表す構文に「いう」という語が使われる。文化を共有し、日本手話の語彙に一定の影響を与えている日本語の「いう」にはそのような意味がないことから、日本手話独自のルートで拡張してきたものだと考えられる。

- (1) 飲み会 PT3<sup>nod</sup> 乾杯 まず ビール 注文 いい HS-m //PT3 日本酒 飲む PT3<sup>HS-m nod</sup>//PT3 いう  
目細め、眉寄せ PT3

飲み会では、普通まずビールを注文するものだが彼女は日本酒を飲む。彼女はそういう人である。

この例文では「共有されているマナーに反して日本酒を飲む」という点が非典型的な（意外な）習慣にあたる。「(マナー通り)ビールを飲む人だ」といいたくても「いう」を使った構文では表せない。意外性がないからだ。「今回だけ日本酒を我慢しきれず頼んだ」といった文脈にしてもだめで、過去から未来へ至って継続する習慣を表すときのみ「いう」を使うことができる。ただ、習慣のみを表したい場合、「いう」ではなく、副詞「いつも」を挿入することで表せる。日本手話では他の言語と同様、テンスは副詞でしか表されないが、前半の命題がたとえ「このあいだ 忘年会」でという副詞句で修飾されていても、「PT3 いう」を付け加えることで、「意外にも彼女はいつもそうしている」という意味が加わる。また、確信があれば一度しか目撃していなくともこの人の性格に基づく習慣性を報告してよい。

この習慣性をマークする「いう」は、なぜ、話すことに関係がある語「いう」(人差し指を立て、話者の口から前に移動する)で表されるのだろうか。

## 2. 手話の多義と文法化

手話単語も、音声言語の単語と同じく意味拡張するし、文法化もする(cf. Janzen & Shaffer, 2002; Shaffer, 2008)。手話言語が特殊なのは、まずその類像性である。Meir は、十分に類像的な語彙はメタファー的拡張をしないという二重写像制約を提唱した(Meir, 2010)。しかし、どの程度類像的だとこの制約がかかるのかは議論になっており(Kimmelman, Kyuseva, Lomakina, & Perova, 2017)、語彙が類像的に見えても、意味拡張するものは多い。また、語源がジェスチャーにさかのぼれる文法要素は多く、手指語彙を経過するものと、周囲の音声言語と共有される非手指のジェスチャーが非手指マーカーとして手話の文法要素になるものがある(Wilcox, Rossini, & Pizzuto, 2010)。「いう」は、口元から人差し指を立てた手型を前に出す、発話事態をなぞる類像的な表現ではある。しかし、日本手話の「話す」とは異なり、一致動詞ではなく、十分に類像的でないのか、様々な意味・用法がある。

文法化は「名詞や動詞などの内容語的な形態素が時を経ることで文法的な形態素に変化すること」「助動詞のような文法性の低い形態素が、より文法性の高いテンスやアスペクトマーカーなどになっていくこと」

\* 日本学術振興会・東京学芸大学 Yufuko.takashima@gmail.com

† NPO 法人 手話教師センター

‡ University of New Mexico

(Bybee, Perkins, & William Pagliuca, 1994) と考える。手話言語は書記形態が乏しく研究史も浅いため、通時的な研究が難しい。また、共時的に意味的な面は観察できるが、音声言語のように形態素が音韻的に短縮していくことは乏しい。手話の音素は位置、動き、手の向きからなり、アスペクトは動きの変化で表すことができる(Klima & Bellugi, 1979)。一方、テンスについては、動詞の語形変化は珍しく、時間を表す副詞(今、昨日など)を付加するのが一般的である。また、モダリティについては、ジェスチャー語源の語がモダリティを表す助動詞になる(例えば STRONG が可能を表す CAN になるなど)(Wilcox & Shaffer, 2006; Xavier & Wilcox, 2014)。日本手話でも内容語がモダリティマーカーになり、手指要素は内容語と同一形態を保っているものがある(Matsuoka, Yano, Akahori, & Oka, 2016)。

### 3. 証拠性

証拠性は、情報源についてのマーカーであり、直接経験と間接経験に分けられる。間接経験は推論と伝聞に分かれる(Aikhenvald, 2004)。本稿では「いう」に着目するが、発語の動詞が証拠性へ拡張することは他の言語でも見られる(Aikhenvald, 2011)。また、手話言語では文法化が進んでも、語の形が変わることが少ないため、表れる構文が変わることを文法化、多義として捉えることが必要である。証拠性は新情報の入手に関わるため意外性(mirativity)に拡張することもよくある(Aikhenvald, 2012; Delancey, 2001)。

手話言語では、証拠性マーカーについての報告は、いわゆるロールシフトと呼ばれてきた、他者の視点に乗り込むことで伝聞情報を伝える方略(Jarque & Pascual, 2015; Shaffer, 2012)以外、ほとんど研究が行われていない(Wilcox & Shaffer, 2018)。

証拠性は(とくに推論)モダリティの一部だとする見方もあるが、直接経験のマーカーはどちらかというところとテンスと関係が深い(De Haan, 2012)。認知文法では、証拠性はテンスやダイクシスが含まれるグラウンディングシステムの一つとして捉えられる(Langacker, 2017)。

## 4. 日本手話の「いう」の拡張

### 4.1 字義通りの「いう」

- (2) 今 説明<sub>1a</sub> 渡す<sub>1→2</sub> 首傾け // いう むり 首ふり PT1 // ごめんなさい  
今 説明されたことをまるごとは言えない。ごめんなさい。

(手話文化村 DVD 手話翻訳 第4章 手話語彙「言う」: 以下 文化村)

- (3) 研究 責任 弘前大学 副学長 PT3 観光 医療 いろいろ 応用 できる 研究 進める たい いう PT3  
研究責任者の弘前大学副学長は、観光や医療などさまざまな分野に生かせるよう研究を進めていき  
たいと話しています。(NHK 手話ニュース 2018年2月19日)

(2)のように一人称が、誰かに何かを〈伝える〉という意味での用法がある。これは、「いう」だけでなく、口の位置で握った手を前方に向かって開く「話す」と置き換え可能である。ここでの動詞「いう」の主語は文末の PT1 で示される一人称である。また、(3)のように、三人称でも主語を示せば、その人が言ったという使い方ができる。最後の PT3 が「いう」の主体(発話者)を示しており、「いう」は発話者を主語にとる動詞であることがわかる。

### 4.2 証拠性: 伝聞

- (4) 珍しい いう 難しい いう-方法 いろいろ 作る 知能 入れる++ 覚える++

間違い 減る 正しい できる いう\* nod

独特の言い回しなどを AI に繰り返し覚えさせているうちに精度が高まったということです。

(NHK 手話ニュース 2018 年 2 月 19 日)

三人称の誰かが発した内容の最後に「いう\*」をつけると、伝聞情報であることを示すことになる。三人称の発話主体が背景化し、文中で明示されないと 4.1 の顎先から前方へ G 手型を一度だけ動かす「いう」とは異なり、小さく 2 回顎先で G 手型をトントンと叩く「いう\*」に語形が変化する。これが文法化した「いう\*」(伝聞情報マーカー)である。

#### 4.3 私が断定する→断定した情報をマークする

(5) PT1 先輩 野球 強い 打つ+++ PT3 強い PT3 いう できる PT1 PT3

先輩は野球のセンス抜群。まったくそのとおり。

(文化村)

この用法では、一人称の PT1 をつけることもできるし、つけなくてもできる。PT1 を付加するときとはとくに、自分の経験や知識をもとに断定することを示し、PT1 を付けないときは、自分の経験だけでなく、皆が知っている共有知識に基盤をおいた〈断定〉ということになる。これは、判断する主体が背景化した表現であり、PT1 が付かなくなることにより、文法化のプロセスが一段上がるといえる。

#### 4.4 直接経験・新情報(意外性)

(6) お店 おいしい いう<sub>3</sub> 行く<sub>1</sub> 食べる おいしい 目開き・眉下げ いう 目開き 眉上げ あご上げ PT\_front nod+

あるお店がおいしいと言われたので、行って食べてみたら確かにおいしかった。

(7) 前 言う 説明 PT3 (前) これ わからない ない いっしょ 行く

PT3 (前上) これ いう 目細め 眉下げ あご上げ nod PT3 (前上) これ nod nod

前に言ったもの知らないって? いっしょに行こう。今見てるこれだよ。

(文化村)

4.3 の〈断定〉は経験知識に証拠に基づく証拠性マーカーと考えることができる。一方で、(6,7)の用法は、直接経験した新情報をマークする。誰にとっての新情報かは非手指要素によってマークされる。(6)自分が新しいことを直接経験したときは非手指要素も意外性を表す目開き、眉上げが伴い、(7)場を共有した者が直接経験したときに言う台詞としては、眉下げで相手に対する確認を表す。どちらも誰かにとって直接経験する新情報をマークしている。

これらの例から、非手指要素を考慮しても、「いう」自体に一種の意外性(mirativity)の意味があることがわかる。(6,7)では、誰かが今まで直接体験したことがなかったことがマークされているが、このほか「いう」は自分が知らなかった新しい情報を談話に導入するときも使用する。これらの用法では 4.3 までと異なり、「いう」でマークされる情報を発話する発話者は指さしされず、新情報に直接「いう」がつく。

#### 4.5 コピュラ

(8) 私 名前 黒田 いう | 私の名前は黒田です

4.3 の用法は、「できる」が付加されることもあり、何らかの確信に基づいた断定の意味が強いが、〈A は B です〉という既定事実・共有知識を伝えるときにも「いう」は使われる。(8)は、ろう者たちに「〇〇と申します」という日本語と対応すると考えられている。この語が日本語を元にして日本手話の語形「いう」を借用

してきた日本語対应手話のものか議論が残るが、日本語対应手話の「～です」が日本手話の「ある」を用いていることよりは、日本手話話者に受け入れられているようである。

また、このコピュラの構文は、何らかの形で、間にも「いう」が挟まることがあり、トピックマーカースとしての役割を果たし、連想関係を表すことがある。

- (9) a. 冬 いう<sup>mt</sup>いえば スキー | 冬といえばスキーだ  
b. ふろしき いう<sup>mt</sup>いえば 学校 いう | ふろしきといえば学校である

「いう」はコピュラ的な構文をマークするし、トピックマーカースになり連想関係をマークもするが、日本手話のコピュラは、報告のある手話言語と同様、基本的には手指動作ではなく、非手指要素（頷きなど）で表される。このことを鑑みると、文末の「いう」は有標の指標であるといえる。

#### 4.6 習慣性・一般性

- (10) 集合 時間 PT3 いつも 遅れる //PT3 いう PT3  
彼女は集合時間にいつも遅れる。彼女はそういう人だ

(1)では、ある人がいつも普通と違った行動をとることをマークしているとした。(10)も同様だが、こちらは「いつも」という語が付加されている。この副詞と習慣性の「いう」は共存できる。習慣性を、その主体がいつもそうすることが、その人の性質に基づいていることであると考えれば、理解できる。

(11)では、「ドア-開く-閉まる++<sup>バタバタ</sup>」が反復のアスペクトをもつ。(11a)は、ろう者という集合名詞の性質としての習慣性を表しており、一般性と習慣性がどちらもマークされている。(11b)は(10)と同様、個人の習慣性だが、(11c)は黒田さんという個人を事例に、後半の「PT3 ろう いう」で、ろう者という集団一般に拡張している。つまりこの構文では、前半は一例でも、「いう」を付与することで、その集団の成員の習慣的な行動が皆そうであることを意味する。

- (11) a. PT3 ろう 家 ドア-開く-閉まる++<sup>バタバタ</sup> 音 足++<sup>バタバタ</sup> //PT3 ろう いう PT3  
ろう者は、家で、ドアの開閉がバタバタうるさいし、足音もバタバタうるさい。  
ろう者とはそういう人たちだ。  
b. 黒田 家 PT3 家 ドア-開く-閉まる<sup>バタバタ</sup> 音 足<sup>バタバタ</sup> PT3//PT3 黒田 いう PT3  
黒田さんは、家で、ドアの開閉がバタバタうるさいし、足音もバタバタうるさい。  
黒田さんはそういう人だ。  
c. 黒田 家 ドア-開く-閉まる++<sup>バタバタ</sup> 音 足++<sup>バタバタ</sup> PT3//PT3 ろう いう PT3  
黒田さんは、家で、ドアの開閉がバタバタうるさいし、足音もバタバタうるさい。  
ろう者とはそういう人たちだ。

(12a)は、コアラ一般が習慣的に長く寝るということを指しているのだから、一般性と習慣性のマーカースといえるが、(12b)では、成長すること自体はコアラ1頭につき1度しかない事態であるのだから、習慣性ではない。ここで「いう」は、コアラという生き物集団に共通する一般性だけをマークしていると言える。

(12) a. コアラ PT3 わかる 寝る 時間 長い PT3 いう PT3

コアラはいつも長い時間寝る

b. コアラ 赤ん坊 産まれる 成長する 方法 何 産まれる ポケット 入る 成長する PT3 いう

コアラの成長する方法は、産まれたあと、母親のポケットの中に入って成長する

表1のような事態について「いう」が後置できるか確認すると、新情報としても、1個体について1回きり起こる事態はこの構文ではマークされない。これらのことから「いう」が習慣性と一般性に共有される、「性質としての」繰り返し起こる事態（習慣性）やある集団の個体が繰り返し起こす事態をマークすることがわかる。(cf. Langacker, 1997)

表1

	1人(1匹)について	複数の人(動物)について
習慣性	繰り返される事態 田中さんは日本酒を飲む あのコアラはユーカリのかわりに麦を食べる	日本のサラリーマンはビールで乾杯する(アメリカ人ならびっくり) コアラは長く眠る
	1回きりの事態 鈴木さんは癌で死んだ あのコアラは人間に育てられた	コアラは母親のポケットで育つ
		一般性

#### 4.7 「いう」の拡張

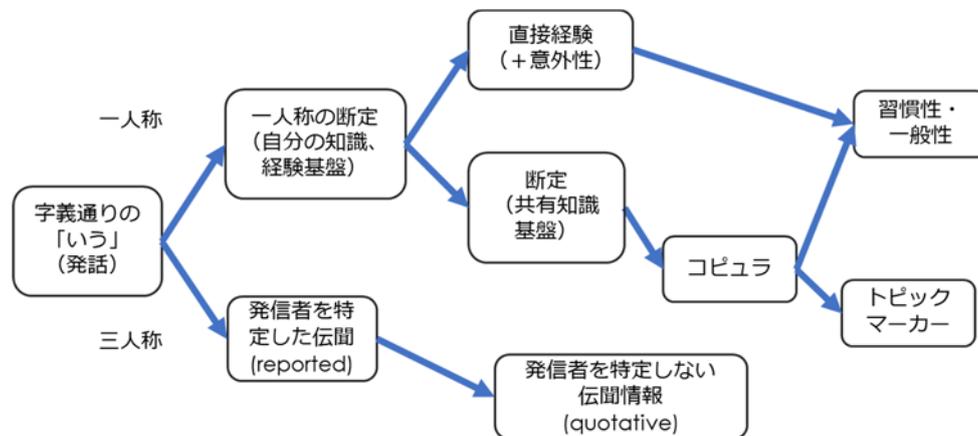


図1

以上をまとめると、図1のような拡張の経路が描ける。まず、字義通りの一人称と三人称が「いう」ことを分けて考える。三人称の「いう」は発信者が指示されないただ伝聞の証拠性をマークする引用マーカーへ拡張する。これは語形が変わる。一人称の〈(私が) [叙述] と言う〉は、「いう できる」の連続で、自身の直接経験に基づく断定マーカーの意味〈[叙述] と言える〉を持つようになる。この時点では一人称を示す PT1 は付加したりしなかったりする。さらに新情報を「いう」で後ろからマークすると直接経験と意外性 (mirativity) を表すようになる。また、共有知識に基づいていることからコピュラの文末マーカーとしても用いられる。コピュラは、時間に関係ない連続的な特性を表す(Langacker, 2008: 396) こともあり、これが習

慣性をマークする動機となっていると考えられる。

## 5. おわりに

この日本手話の「いう」の意味の広がり、共時的に観察した限り、図1のような独自の経路があると考察できる。それぞれの用法では、「いう」に判断主体を示すPT1やPT3がつけられたり、つけられなかったりという構文の差があり、図1の右に行くに従って本動詞用法からかけ離れ、文法化が進んでいると考えられる。意味拡張が進んだ習慣性・一般性の用法でも、基本的には直接経験に基づいた判断がされるのか、「実際にその事態を経験していないと使えない」という制約が残っている。また、多くの音声言語の証拠性マーカーと同様意外性にも拡張していることも、「いう」が証拠性マーカーであることの傍証と考えられる。この証拠性マーカーが断定として働くようになり、コンピュータや習慣性・一般性のような恒常性を獲得できたと推測される。

### [参考文献]

- Aikhenvald, A. Y. (2004). *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, A. Y. (2011). The Grammaticalization of evidentiality. In H. Narrog & B. Heine (Eds.), *The Oxford Handbook of Grammaticalization* (pp. 605–613). Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, A. Y. (2012). The essence of mirativity. *Linguistic Typology*, 16(3), 435–485.
- Bybee, J. L., Perkins, R., & William Pagliuca. (1994). *The evolution of grammar: Tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- De Haan, F. (2012). Evidentiality and Mirativity. In R. I. Binnick (Ed.), *The Oxford Handbook of Tense and Aspect* (pp. 1020–1046). Oxford: Oxford University Press.
- Delancey, S. (2001). The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics*, 33(3), 369–382.
- Janzen, T., & Shaffer, B. (2002). Gesture as the substrate in the process of ASL grammaticization. In R. P. Meier, K. Cormier, & D. Quinto-Pozos (Eds.), *Modality and structure in signed and spoken languages* (pp. 199–223). Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Jarque, M. J., & Pascual, E. (2015). Direct discourse expressing evidential values in Catalan Sign Language. *EHumanista/IVTTRA*, 8(421–445), 421–445.
- Kimmelman, V., Kyuseva, M., Lomakina, Y., & Perova, D. (2017). On the notion of metaphor in sign languages: some observations based on Russian Sign Language. *Sign Language & Linguistics*, 20(2), 157–182.
- Klima, E., & Bellugi, U. (1979). *The Signs of Language*. Cambridge: Harvard University Press.
- Langacker, R. W. (1997). Generics and habituals. In A. Athanasiadou & R. Dirven (Eds.), *On conditionals again* (pp. 191–222). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive Grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, R. W. (2017). Evidentiality in Cognitive Grammar. In J. I. M. Arrese, G. Haßler, & M. Carretero (Eds.), *Evidentiality Revisited: Cognitive grammar, functional and discourse-pragmatic perspectives* (pp. 13–55). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Matsuoka, K., Yano, U., Akahori, H., & Oka, N. (2016). Notes on modals and negation in Japanese Sign Language. *Studies in Language Sciences: Journal of the Japanese Society for Language Sciences*, 15, 1–20.
- Meir, I. (2010). Iconicity and metaphor: Constraints on metaphorical extension of iconic forms. *Language*, 86(4), 865–896.
- Shaffer, B. (2008). BORING: It's anything but. In *Language in the Context of Use: Discourse and Cognitive Approaches to Language* (pp. 283–300).
- Shaffer, B. (2012). Reported speech as an evidentiality strategy in American Sign Language. In B. Dancygier & E. Sweetser (Eds.), *Viewpoint in language* (pp. 139–155). Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Wilcox, S., Rossini, P., & Pizzuto, E. A. (2010). Grammaticalization in sign languages. In D. Brentari (Ed.), *Sign Languages* (pp. 332–354). Cambridge University Press.
- Wilcox, S., & Shaffer, B. (2006). Modality in American Sign Language. In W. Frawley (Ed.), *The expression of modality* (pp. 207–237). Mouton de Gruyter.
- Wilcox, S., & Shaffer, B. (2018). Evidentiality and information source in signed languages. In A. Y. Aikhenvald (Ed.), *The Oxford Handbook of Evidentiality* (pp. 741–753). Oxford: Oxford University Press.
- Xavier, A. N., & Wilcox, S. (2014). Necessity and possibility modals in Brazilian Sign Language ( Libras ). *Linguistic Typology*, 18(3), 449–488.